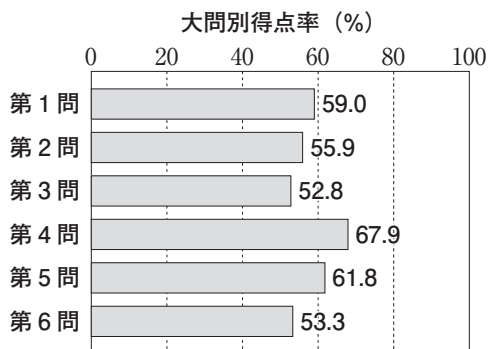
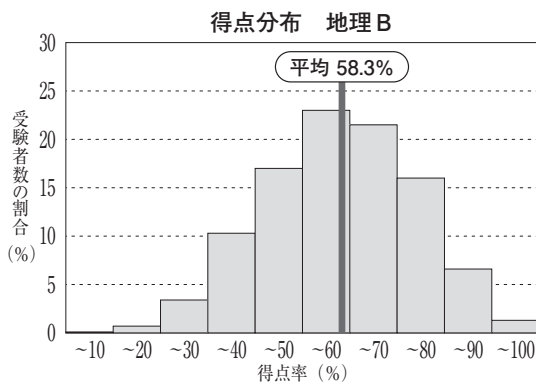


地 理 B

残り半月で地理の得点力は大きく伸びる。ここからの学習が大切！

I. 全体講評

今回の最終12月センター試験本番レベル模試の平均点は58.3点であり、前回の10月全国統一高校生テストの平均点52.2点を6.1点上回った。実力は着実についてきてはいるが、2018年のセンター試験本試験の平均点67.99点とは、まだ9点以上の差がある。今回、得点を伸ばした受験者も、油断せずにこれまで以上の学習を心がけること。また、得点が振るわなかった者は決してあきらめず、ここから勝負という気持ちで学習に臨むこと。センター試験本番までに残された時間はわずかだが、地理は、残り半月であっても努力と工夫次第で大きく得点力を伸ばすことが可能な科目である。Ⅲ. 学習アドバイスを参考に、センター型問題集の演習を中心とする効率的な学習に取り組み、実力を最大限まで高めよう！



II. 大問別分析

第1問 世界の自然環境・環境問題・自然災害
問題演習で知識の曖昧な箇所を見つけたら、解説を丁寧に読み、正確に理解しよう。

大問全体の平均得点率は59.0%であった。極端に正答率の低い問題は無かったが、知識の曖昧さから、やや高めを選択率となってしまった誤答がいくつかみられた。例えば、問1は、Aのアイスランド島を、プレート中央部を貫くマグマが形成した島と判断した受験者が多く、誤答①の選択率が22.2%と高くなった。実際は、プレートの広がる境界からわき出すマグマが形成した島である。また、問6は、中央構造線をユーラシアプレートとフィリピン海プレートの境界と考えた受験者が多く、誤答②の選択率が33.8%と高くなった。実際の両プレートの境界は、西南日本沖の南海トラフである。模試や問題演習に取り組む中で、知識が曖昧なままになっている箇所を見つけたら、解説を丁寧に読むなどして、正確に理解するよう心がけたい。

第2問 第一次産業

センター型問題集の演習に少しでも多く取り組み、統計図表問題を解く力を伸ばそう。

大問全体の平均得点率は55.9%であり、やや振るわなかった。統計図表を読み解く問2、問3、問6の正答率が、それぞれ47.9%、44.0%、43.6%と低かった。問2は、ジャガイモに該当するグラフのみを探そうとした受験者の多くが、ヨーロッパの割合が高い④を選んでしまった。すべての作物とグラフを結びつけようとするれば、④をテンサイ、①をジャガイモと判断できたはずである。問3は、樹園地の割合が大きいキをイタリアと判断することはできたが、アメリカ合衆国とインドの判別に苦労した受験者が多かった。米国西部のグレートプレーンズなどに広大な放牧地が広がる景観をイメージし、牧場・牧草地の割合が大きいクを米国と判断してほしかった。問6は、ドイツなど、EUには遺伝子組み換え作物の導入に慎重な国が多いことを知らず、

その栽培面積が0である③を選択できなかった受験者が意外に多かった。残された期間でセンター型問題集の演習に少しでも多く取り組み、統計図表問題を読み解く上で必要な知識、および正解を推理する力を伸ばしておくこと。

第3問 人口・生活文化と村落・都市

都市地理は頻出。教科書・図説資料集レベルの用語については正確に理解しておこう。

大問全体の平均得点率は52.8%であり、6つの大問中で最低ではあったが、極端に正答率の低い問題はなかった。正答率が7割を超えるような易問がなかったため、平均得点率が低くなった。問6は、正文である③を誤文と判断して選択した受験者が30.7%もいたが、都市地理分野の基礎的な用語であるスプロール現象について、正しく理解していなかったと考えられる。都市地理はセンター試験の頻出分野である。知識が曖昧なままの受験者は、教科書・図説資料集レベルの用語については正確に理解しておくこと。

第4問 東南アジア

地誌分野の学習がだいぶ進んできた。さらに知識を充実させ得点力を高めていこう！

大問全体の平均得点率は67.9%であり、6つの大問中で最も高かった。多くの高校が系統地理を終えてから地誌を扱うため、毎年、地誌の学習は遅れがちになるが、ここに来てだいぶ学習が進んだようだ。2016年度よりセンター試験でも地誌の大問が2題出題されるようになり、近年、地誌はかなり重視されている。残された期間、地誌の問題演習に積極的に取り組み、さらに知識を充実させることで、得点力を高めてほしい。地誌は短期間で学力を伸ばしやすい分野である。

第5問 イギリスと日本

まずまずの出来だが、日本とロンドンのニュータウンの違いについて復習しておこう。

大問全体の平均得点率は61.8%であり、6つの大問中で2番目に高かった。第4問の講評でも述べたとおり、例年、地誌の学習は遅れがちになるが、センター本番も近づき、学力もかなり整ってきた。このまま地誌を得意分野としたい。全体的によくできている中で、問4は誤答③の選択率35.6%が、

正答率37.7%に迫ってしまった。選択肢②について、日本のニュータウンは職住分離型のベッドタウンであるのに対し、ロンドンのニュータウンは職住近接型を意図して建設された。重要なことなので頭に入れておくこと。この選択肢は、きちんと誤文と判断してほしかった。本問は落としたい基礎問題である。

第6問 地域調査（長野県）

地域調査の大問はほぼ必ず出題される。できるだけ多くの問題に接し、慣れておこう！

大問全体の平均得点率は53.3%であり、6つの大問中で2番目に低かった。問4の正答率が11.0%と極端に低かったため、大問全体の出来があまりよくないものとなってしまった。問4は、長野県と新潟県の林業産出額の大半を占める力を、都市との近接性という視点から栽培きのこと推理しなければならない難問であった。ゆえに、不正解だった受験者も、あまり気にしなくて良い。むしろ、思考力をフル回転させてこの問題の正解を得られた受験者は、大いに自信を持ってもらいたい。地域調査の大問はほぼ必ず出題されるセンター地理の看板である。残された期間、できるだけ多くの問題に接し、よく慣れておきたい。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆センター試験本番形式の問題演習が効果的

センター試験本番形式の問題集は、実際に出題されそうな重要事項が詰まっており、限られた時間で高校地理全体を復習するのに最適である。「持てる知識をフルに活用して正解を推理するぞ」という意識で取り組み、それでも間違えた問題については解説を熟読する。その上で、間違えた理由が誤った推理方法によるものとわかったら、「なるほど、こう考えればよかったのか!」と、その時点で正しい考え方を身につける。間違えた理由が知識の欠落によるものであったら、その時点で正しい知識を吸収する。このような演習を重ねれば、残された期間で大幅に実力を高めることができる。地理は残り半月でも、質の良い学習によって大きく得点力を伸ばせる科目である。ここからが本番のつもりで、がんばってもらいたい。